

生 活

「現代の医療や福祉に欠けているのは、お年寄りや患者さんの、心のケアの視点では」と東海大健康科学部助教授・村田久行さん(左)と神奈川県秦野市在住。老人ホームや施設などを訪問し、お年寄りや終末期の患者のそばで話を聴く援助活動を始めて、三年になる。その名も、傾聴ボランティア。ボランティア活動に参加する人を養成する講座も開いており、受講生二十三人が各地で活動を始めている。

「傾聴」とは、英語で「ラックティブ・リスニング(一生懸命に聴く)」。その頭文字をとって、合言葉を「アルク(ALIC)」とした。

大学の社会福祉学科で教える村田さんが、本職を離れ、話し相手を切望している孤独なお年寄りや患者をヘルプサイドに訪ね、話を聴く活動を思いついたのは四年前。自身が講師を務める市民講座「生と死を考える」で、受講生の看護婦さんから問いかけを受けたのがきっかけだった。

「私たちの仕事に、どんな意味があるのか」という治療を施しても「んんんん」と患者さんに、何をしても「でしうか」と聞かれ、即答できず悩んでた。考え続けた結果、欧米にはすでにあるのに、日本の医療・福祉の現場にはないものが、それが心のケア。もっと深く聞いて、魂の苦痛に對するケア、それを援助する訓練を受けた専門家がいないと気づいたのだ。

20～60代まで

約の割合は男性

活躍中の傾聴ボランティアは、市の依頼で受け付けてきた田村さんの講話で実習訓練を受けた。年齢は年代から十代代まで。一般の主婦のほか、ホームヘルパー、看護婦など、二十三人中、七人は男性だ。

活動の場は、主特別養護老人ホームや救護施設、病院など。訪問先の施設は、ボランティアの養成講座の責任者田村さん(右)と受講生(左)が一緒に行き、傾聴は原則として一

村田 久行・東海大助教授が講座

ボランティアら各地で活動

傾 聴



「話し相手のいない孤独なお年寄り、人のために何かしたいと考えている人たちを結びつけるお手伝いをしたい」と語る村田久行さん(神奈川県伊勢原市)。

お年寄りらの「魂の叫び」 聴くことに徹し心のケア

共感して聴く。そして、患者さんらに寄り添う。傾聴ボランティアの活動は、傾聴が鍵。傾聴とは、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。

言葉の意味へみ 取る感受性必要

傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。

「ホームケアは対応が難しいが、傾聴は、傾聴ボランティアの活動は、傾聴が鍵。傾聴とは、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。

傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。

傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。傾聴は、話し手から出てくる言葉を聴き、その意味を汲み取り、話し手と同じ気持ちで話を聴くこと。

(通川 和子)